

戦後60年 新井勝紘ゼミの企画展示「戦没兵士の『ビルマ便り』」が大反響

終戦60年の節目の夏。軍事郵便から戦争を考える「戦没兵士の“ビルマ便り”」展示が、7月4日から17日まで生田キャンパスで開催され、連日多くの来場者（約1000人）があった。開催前から各新聞に大きく紹介され、NHKのニュースで取り上げられるなどメディアでも話題になった。主催した新井勝紘ゼミ（文学部人文学科歴史学専攻）のもとには展示終了後もマスコミからの取材が続いた。

メディアが大きく報道

新井ゼミは、軍事郵便を読み解くことで戦争を考える実習を3年前から行っている。太平洋戦争の1941年に召集され、44年、24歳でビルマ戦線のインパール作戦に散った川崎市久本（現高津区）出身の小泉博美（ひろよし）さんが家族に宛てた郵便を解読。その成果を昨年、冊子『専修史学』に発表し、現物を市民に広く伝える機会を設けようと手作りで展示を企画した。

企画展では葉書や手紙103通のほか思い出の写真十数点、遺品、軍事郵便に関する参考資料、ビルマ戦線関連の文献なども展示。

「戦地はつらいです。然しもっともつらいのは銃後の皆さん達です。銃後の健全な護りには誰しも感謝しない者は一人もありません」

展示書簡のひとつひとつは、検閲によりところどころ黒く塗られた伏せ字まじりもあるが、戦地で死と向き合いながらも家族を思いやる言葉がぎっしり詰まっている。

来場者は60代から70代までの戦争体験者がほとんどだったが、10代、（20代の若い世代も訪れた。会場では、ゼミ生（32人）が交代で受付を担当。戦争に対する意見を求めるお年寄りが多かったという。またインパール作戦などに関する文献や映画の情報、「我が家にも軍事郵便がある。歴史教育に役立ててくれないか」との問い合わせもひっきりなしで、「まさにうれしい悲鳴をあげました」（新井教授）。

博美さんから実際に手紙をもらった実妹の小泉富美子さん、仲道敬子さんと甥の小泉恵司さんら遺族も訪れた。82歳の富美子さんは「このような形で兄の生涯に光をあててくれた新井先生と学生の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。さぞかし生きて帰りたいかつらうと兄を思い、涙がこぼれました」と手紙をいとおしそうに見ていた。

予想を超える反響に「戦後60年という年であり、送り主が地元出身者だったこともあったが、戦争で亡くなった当事者と同年代の学生が、戦争と真摯に向き合い、こつこつと取り組んだ企画として、感銘を与えたのでは」と話す。

新井ゼミでは、新たな軍事郵便解読に取り組んでいる。

教科書にない「歴史」を学んだ

軍事郵便解読に取り組んだ4年次ゼミ生の感想――

◆郡司篤さん

一般の人々が接した戦争を手紙からリアルに受け止めることがで



新聞各紙も大きく取り上げた



資料を提供した小泉富美子さん（中）と仲道敬子さん（右）も会場を訪れた（左は新井教授）



生田キャンパスの図書館に展示された「軍事郵便」



ゼミ生に話しかけてくる来場者も

きました。ゼミの成果がマスコミにまで取り上げられるなど、思ってもみなかったこと。すばらしい経験をさせてもらいました。

◆神崎梨沙さん

戦争という極限の状況にもかかわらず、文面には家族のことや日常も書かれている。まさに普通の人々の感情を読むことで、教科書では得ることができない歴史を学びました。



さようなら「生田野球場」～新校舎建設で姿消す～

準硬式野球部がお別れ会

生田野球場が新校舎建設に伴い、その姿を消すこととなり、7月31日、このグラウンドを本拠地として活動してきた準硬式野球部(中村清監督)がお別れ会を行った。

この日参集したのは現役、OBら100人以上。記念撮影のあと現役、OBに分かれて親善試合を行い、和気あいの雰囲気の中、最後に全員でお神酒を捧げグラウンドに別れを告げた。

野球場は1950年(昭25)に完成。その後、66年(昭41)に野球部が伊勢原に移転して以来、同部が優先的に使用してきた。長年監督として指揮をとってきた江崎久氏は「ここの芝と土は、66年の卒業生から現在まで、部員たちの汗と涙が染み込んだ思い出そのものです。進路はさまざまですが、ここで育ったOBが高校野球の監督として今年、岐阜県大会決勝で対戦し、代表校が甲子園の舞台に立つという事実も、その原点がこの野球場にあるような気がして感無量です」と語った。



思い出のグラウンドで準硬式野球部員たち(前列左から5人目が江崎氏、隣が中村監督、その隣が湯浅敏元コーチ)

《キャンパス探訪 -27-》

森口忠造先生胸像

森口忠造は1933年(昭8)本学を卒業、毎日新聞社に勤務した。校友先輩の川島正次郎とも知友で、評議員・理事などを経て64年(昭39)理事長に就任(88年、79歳で死去するまで。87年から総長兼務)した。

川島総長、相馬勝夫学長と共に大学の施設拡充と対外PRに積極的だった。体育館、図書館などの建設、当時、高層大学校舎として話題を集めた神田1号館の竣工(73年)もあった。また石巻専修大学の開学(89年)も主導、大学スポーツ振興にも積極的でエネルギッシュだった。

胸像は神田キャンパス1号館15階ホール「報恩の間」に置かれ、台座に「大学の興隆交流」の功績を称える。92年(平4)校友会が相馬勝夫胸像と共に委託制作、仲良く並んで見守っている。

